

# 韓国男性にみる美容実践と男性性の位相

－軍隊におけるコミュニケーションに注目して

Beauty Practice and Phases of Masculinity among South Korean Men  
: Communication in the Military.

小平 沙紀\*

Saki Kohira

## 1. はじめに

本稿は、韓国において男らしさを生成する制度とされてきた軍隊を対象に、美容実践を介した男性同士の関係性とそのジェンダー化された意味を議論する。男性の美や外見に関する従来の社会学的研究では、身体が男性性の競争の場として機能する実態に焦点が当てられてきたが、その分析は西洋中心であり、なおかつ私的領域に内在した文化分析に留まりがちであった（佐藤，2010；Taga, 2004）。他方、軍隊を対象とした男性研究では、軍隊を近代国家の男性性構築の場であり、マチズモを生成する制度ととらえてきたが、現在、見出されるような、従属的・女性的な要素を取り込んだ多様で新たな男性性のあり方<sup>(1)</sup>と接合した研究は不足している。

それに対し本稿では、韓国の軍隊を事例とし、その社会における「ヘゲモニックな男性性」（Connell & Messerschmidt, 2005）の構築主体である軍人の美容実践および、それに付随する

コミュニケーションに目を向ける。義務兵役制度が存在する韓国では、成人男子の全員に約二年の兵役の義務を課している。なかでも、現役<sup>(2)</sup>と呼ばれる服務形態においては、軍事訓練だけでなく、兵舎での共同生活を通してジェンダー規範が身体化されていく。本稿では、兵舎での美容実践を男性性の視点から読み解くことで、美容実践を介した男性性の階層の様態を明らかにするとともに、軍隊経験が男性の身体意識に果たしうる意味の一端を提示することを目的としている。

複数の男性性のヒエラルキー的な関係に着目し、権力と結びついたジェンダー秩序をとらえた Connell (1987, 1995) は、男性性を複数形で捉え、それぞれの男性性の間に権力構造と階層関係を見出した。Connell の議論の重要な点は、男性性が集団や制度のような集合的な場で行使され、環境や条件に応じて能動的に構築される複雑な過程を描き出そうとしたことである。つ

\* 東京大学大学院学際情報学府博士課程

キーワード：韓国男性、美容実践、軍隊、義務兵役、男性性

まり、そこでは静態的で固定の「男らしさ」だけでなく、変化や矛盾を伴いながら、戦略的に構築されるジェンダー化された解釈にも焦点を当てている。本稿では、一見、男らしさを育むとされる軍隊の規範と矛盾するような男性の美容実践が、軍隊内の秩序のなかで有益な行為と認識され、矛盾なく織り込まれていく過程を精緻に検討する。それにより、個々の男性たちが女性的な行為とされてきたセルフケアとどのよ

うに出会い、コミュニケーションを介して受け入れていくのかというミクロな文脈を明らかにできると考える。このように、本稿で取り上げる韓国の軍隊における事例は、男性の美容と軍隊での男らしさという社会学分野で別々になされてきた議論を統合し、Connell が論じた現代の男性性の多様な実践を照射しようという点で、先行研究の不足を補いうる最適な研究対象であると考ええる。

## 2. 問題の所在

### 2.1. 軍隊と男性性

近代国家の男性性構築の場として欠かせない軍事領域の男性研究は、軍隊が暴力を正当化し、男らしい男を生成するイデオロギーだとする Enloe (2000) の議論や、ある社会、文化において、支配的な男性性と従属的な男性性が共犯関係として存在し、様々な社会関係を通して生産される構築物として男性性をとらえる Connell (1987, 1995) の議論を基礎に発展してきた (佐藤, 2010; 佐々木, 2005)。さらに、Connell の理論をもとにして軍隊と男性性を結びつけた「軍事的男性性」(military masculinities) の議論では、軍隊が求める「真の男」を身体化するプロセスのなかで、好ましくない男性性を女性化して排除することで軍事的男性性が達成されていく、複雑でパフォーマティブな構築過程が描かれている (Higate ed., 2003)。一方で、グローバル化時代においては、世界的な文脈での男性性の構造を考慮する必要があるにも関わらず、東アジアの事例は国際的な学問的作業の場で周縁化されてきた (Taga,

2004)。

本稿の調査対象である韓国では、「軍隊に行つてこそ一人前の韓国男児」と言われるなど、義務兵役がヘゲモニックな男性性を獲得する通過儀礼とされている (丕, 1993)。韓国における軍隊の男性研究では、男性中心の軍事文化が韓国社会に与える影響について強調されてきた (朴, 2008)。一方、軍隊における男性同士の関係性については、性的暴力や同性愛嫌悪に焦点を当てた研究が多く行われてきた。そこでは、軍隊における男性の絆が、同性愛者を他者化する相互行為によって成立し、権力構造を制御し特定の男らしさを生み出すための道具とされていく過程が描かれている (cf. 정, 이, 2018)。

しかし、これらの議論は、もっぱら軍隊が韓国社会に与える影響や軍隊内で生じる暴力と排除に焦点を当てており、軍隊経験を契機に兵士間で構築される関係性についてはほとんど言及してこなかった。言い換えれば、軍隊内におけるセクシュアリティや暴力などの否定的な側面

を照射してきた一方で、問題化されることのない軍隊生活での日常的な相互行為は、議論の範疇に含まれてこなかったのである。その要因として考えられるのは、韓国社会において兵役がその存在意義を問うことがないほど自明化しており、職業軍人と徴兵された男たちの経験を区別し、軍隊を職業軍人の集団としてだけ見る傾向があったことである（権，2006：220-222）。そして、軍事文化を強調するあまり、兵役経験の多様性を照射しきれていなかった点も指摘される（佐々木，2013）。

このように、軍事領域の男性研究は、軍隊制度と男性性との強い結びつきが国家によって維持されてきたこと、そして軍事主義が国家の政治的関心に沿うようにヘゲモニックな男性性を構築する過程を明らかにしてきた。一方で、一連の先行研究では、粗野な軍事的男性性に過剰

な説明力を与えることで、軍人男性を社会構造的な文脈から切り離し、彼らの主体性を捨象しているという問題があった（Higate, 2007）。また韓国においては、軍事文化が社会に与える影響についての議論に集中しており、維持・再生産される既存のヒエラルキーに注目しながらも、変化の側面を軽視しているという問題点があった（磯崎 2011：161-162）。これに対して、本稿では軍隊と社会を横断する美容実践という事象に焦点を当てることで、強靱性や暴力性が特徴とされてきた既存の軍事的男性性の議論に留まらず、社会的実践を用いた軍人たちの新たなダイナミクスを記述する。これにより、軍事的男性性の視座から眼差されてきた軍人の実践を、「社会的男性性」（Connell, 2002：35）と接合し、軍人たちの主体性や社会的文脈に即した新たな男性性のあり方を提示できると考える。

## 2.2. 韓国男性の美容実践

近年、男性の美容実践の活発化は世界的な潮流で、男性向け化粧品市場は年々拡大している。Persistence Market Research<sup>(3)</sup>のレポートによると、2016年から2020年まで平均3.5%の伸び率を示し、さらに今後10年間で市場規模は二倍になるとの見通しである。2000年代に入り、「メトロセクシュアル」（metrosexual）と呼ばれる、セルフケアやファッションを積極的に楽しむ男性たちが登場し、そうした男性像はメディアにより国境を超えて拡散され、男性の美容実践をより活発化・多様化させていった。なかでも、東アジアの儒教圏の男性たちの美容実践は活発で、Jung（2011）によると、彼らは儒教における中性的な男らしさ<sup>(4)</sup>に由来す

る「ソフト・マスキュリニティ」を体現してきた。とくに近年、韓国男性における美容実践の動向は注目に値する。韓国は、男性化粧品の一人当たりの消費額が世界第一位で、毎日経済2019年10月17日号によると、男性一人当たりが化粧品に使う費用は米国やフランスの10倍以上にもなる<sup>(5)</sup>。さらに美容整形も盛んで、韓国の大手リサーチ会社の調査によると<sup>(6)</sup>、20代男性の約6割に美容施術の経験があるという。こうした美容実践に積極的な男性は、韓国で「グルーミング族」（그루밍 족）<sup>(7)</sup>と呼ばれている。

男性の美や外見に関する社会学的研究では、男性たちは身体的魅力を高めるために化粧品使

用や身体改造を選択していると指摘され、これを新しい具体化された男らしさの出現として説明している (Atkinson, 2008; Holliday & Cairnie, 2007)。また、男性の美容実践について Gilman (1999) は、美容整形が女性的な行為としてジェンダー化されたのは 1990 年代に入ってからで、男性の美容整形は「真の」男 (“real” men) になる手段としての側面を持ち、男性性の顕在化であると指摘する (Gilman, 1999: 36)。

しかしながら、韓国男性の美容実践についての先行研究では、経験的視座からの考察と義務兵役との関係性の議論が不足しているという問題があった。経験的視座からの考察については、須長 (1999) や藤田 (2005) の研究において、家族や友人との人間関係を通じて男性の理想の身体像が形成されたり、競争的な身体可変行為が行われていることが指摘されている。また、日本の美容整形について、日常的なコミュニケーションの位相から論じた谷本 (2018) は、男性は美容実践に関して身近な女性からの助言を重視していることを明らかにしており、日常的な関係性や相互作用に着目した考察は、韓国における男性の美容実践の考察にも有効であろう。さらに、Elfvig-Hwang (2020) は、韓国の男性会社員たちの身だしなみは、集団内の調和、職場での能力、社会的ヒエラルキーの維持への考慮であると指摘したが、同様に閉鎖的で、しかも女性が排除された軍隊という組織のなかで行われる美容実践に対しても、こうした先行研究は有益な知見となるのではないだろうか。

また、韓国男性の美容実践と義務兵役の関係

性については、韓国男性の多くが、軍隊を通じて美容実践に目覚めるという事実が徐々に美容産業にも取り込まれ、軍人は化粧業界の新たなターゲット層として注目され始めている<sup>(8)</sup>。一方で、軍人の美容実践に関する先行研究は、軍隊における美容実践の現状を記述した研究 (장, 2014) や、軍人の肌疾患と化粧品使用を統計的に明らかにした研究 (cf. 이, 권, 2021) などに留まり、社会学的な考察は管見の限り行われていない。しかし、軍隊のマチズモの規範と、一見、矛盾するような、軍人の活発な美容実践が生起するミクロな文脈の考察は、男性たちの女性的な行為とそれに付随するコミュニケーションを通して、男性の階層関係において最も文化的に優位にあるヘゲモニックな男性性が、その他の男性性を支配する既存の権力構造を逆説的に維持・強化している一例を示しうる。言い換えれば、こうした権力構造が軍隊的な「過剰な男らしさ」(hypermasculinity) と相反するかたちで再生産されていく、2000 年代以降の軍隊における男性性の組織的身体構築のの様式を明らかにできるのではないだろうか。

ここにち、男性性の多様な構築過程を記述することは社会学的にも意味をもつ。Turner (1992) は、「身体社会学」(sociology of the body) という社会学の新たな下位分野において、「身体化」(embodiment) を提唱し、社会的実践が身体に働きかけると同時に、身体が文化・社会を変容させていく様々な過程を問う視座を拓いた。社会学的な議論が既に指摘しているように、グローバル化や性役割規範の変容は、男性たちに新たなアイデンティティの獲得を促し、その結果、外見の美しさが男女問わず

資本として機能するようになった (Hamermesh & Biddle, 1994)。本稿では、軍隊内での美容実践を、現代韓国における男性性の先端的な局面として位置づけ、「軍隊制度のなかで、軍人たちの美容実践はどのように取り込まれ、男性性をどう変容・強化しうるのか？」という問いを立て、軍隊における美容実践のジェンダー化されたあり方を明らかにする。調査方法は、韓国の兵役経験者たちへのインタビュー調査のデータを用いて、軍人間で美容実践を通して構築される人間関係と身体意識を明らかにし、それが

### 3. 調査概要

#### 3.1. 分析視座

以上をふまえて、本稿では、韓国男性の語りから軍隊での美容実践とそれに伴うコミュニケーションを明らかにする。その上で、そうした経験が彼らの身体意識やジェンダー規範に影響を与えているとしたら、それはどのようなものかを以下の分析視座から議論する。

第一に、須長 (1999) の分析を参考にし、軍隊での美容実践の特徴と、それを取り巻くコミュニケーション、およびそうした経験への意味づけを記述する。第二に、本調査においては、個人が自身の経験に付与する主観的な意味に焦点化するため、象徴的相互作用論に基づく考察を行う (Flick, 2009=2011)。Blummer (1969,

もちうる意味を提示する。軍隊生活によって生成される関係性や身体意識という内在的な視点は、とくに軍隊のような閉鎖的空間に対しては適用が困難である。なぜなら、制度上の問題から参与観察はほぼ不可能であり、文献調査にも限界があるためである。そのため、ミクロな次元の考察には、当事者の語りを参照することが最適なアプローチであると考え<sup>(9)</sup>。以下、3. では分析視座とデータ概要を示し、4. では、美容実践の様相を分析することを通して、その男性性の構築との関係性を論じる。

1991) によると、象徴的相互作用論では、「個人が、自分の出会ったものごとに対処するなかで、その個人が用いる解釈の過程によってあつかわれたり、修正されたりする」(Blummer, 1969=1991: 2) という点を踏まえており、こうした立場は、軍隊での美容実践への意味づけを分析するのに最も適していると考えられる。本稿では、まず軍隊における美容実践とコミュニケーションの実態について、ジェンダー論の視座から考察を試み、さらに、そこに見いだされる軍隊での美容実践をめぐる主観的解釈について、象徴的相互作用論から分析を行う。

#### 3.2. データ概要

本稿では、2021 年 7 月～9 月に筆者が行ったインタビュー調査から、一部のインタビュー・データを抜粋して使用する。インタ

ビュー対象者は、大学進学、兵役、就職活動など多くのライフイベントを経験し、軍人の美容実践が目目され始めた 2000 年代以降に、現役



表1 インタビュー協力者の基礎情報

|     | 年齢  | 居住地  | 学歴  | 職業    | 兵役の勤務形態              | 調査形式  | 使用言語 <sup>①)</sup> |
|-----|-----|------|-----|-------|----------------------|-------|--------------------|
| Aさん | 31歳 | ソウル市 | 大卒  | 会社員   | KATUSA <sup>②)</sup> | オンライン | 日本語                |
| Bさん | 22歳 | 大田市  | 在学中 | 大学生   | 陸軍                   | オンライン | 韓国語                |
| Cさん | 22歳 | 大田市  | 在学中 | 専門学生  | 陸軍                   | オンライン | 韓国語                |
| Dさん | 25歳 | 龍仁市  | 在学中 | 大学生   | 陸軍                   | オンライン | 韓国語                |
| Eさん | 38歳 | 東京都  | 大卒  | 経営者   | 義務警察 <sup>③)</sup>   | 対面    | 日本語                |
| Fさん | 33歳 | ソウル市 | 大卒  | 会社員   | 陸軍                   | オンライン | 韓国語                |
| Gさん | 26歳 | 龍陽市  | 大卒  | 会社員   | 陸軍                   | オンライン | 韓国語                |
| Hさん | 38歳 | 東京都  | 短大卒 | 求職中   | 陸軍                   | オンライン | 日本語                |
| Iさん | 38歳 | ソウル市 | 大卒  | 会社員   | 陸軍                   | オンライン | 韓国語                |
| Jさん | 31歳 | 東京都  | 短大卒 | 飲食店勤務 | 陸軍                   | オンライン | 日本語                |

※年齢は2021年当時の満年齢

として義務兵役を経験した20代～30代の韓国男性10名である<sup>④)</sup>。協力者は、機縁法を用いて、筆者の友人および友人の紹介と、漢陽女子大学の平井敏晴助教授の紹介を通じて集めた。インタビュー形式は、回答の自由度が高く対象者の主観的視点に容易にアプローチできる半構造化インタビューを採用した。調査時間は、一人当たり1時間半～2時間程度であった。データ分析については、同意の上でインタビュー内容をスマートフォンに録音し、データ収集と同時期に調査者が日本語で書き起こした逐語録をテキスト分析の指標とした。分析方法は主題分析を参考に、逐語録のなかから軍隊での美容実践とそれに伴うコミュニケーションに関する語りを分類し、内容を代表するラベルを付し、具体から抽象へとコード化を行った。以下、表1に協力者に関する基礎情報を載せる。

なお、本調査の協力者は全員が高等教育を受けた若年層であり、兵役での所属部隊が陸軍に偏っているという特徴がある<sup>⑤)</sup>。しかし、本研究の目的が、韓国社会において、ヘゲモニックな男性性を有すると予想される男性たちの多様な実践の考察であることから、属性の偏りは共時的な視点からの分析を可能にする特徴であると考ええる。また、兵役における勤務形態については、大韓国防衛部発行の2023年版防衛白書によると、現役サービスの約73%が陸軍所属であり、もっとも一般的な勤務先である陸軍への偏りは、一枚岩に見なされうる彼らの個人的な経験の機微を明らかにするうえで、有効であると考ええる。さらに、本研究は、母集団の特徴へと還元しがたい男性たちの個別具体的な検討を行う個性記述的研究であるため、データの代表性には重きを置いていない。

## 4. 事例の分析——軍人としての身体——

### 4.1. 美容実践とコミュニケーション

#### 4.1.1. 仲間との情報交換

장, 한 (2014) によると、軍人は劣悪な環境要因による肌損傷から肌を保護するため、化粧品の使用頻度と種類が多い傾向にある。こうした環境を、彼らは実際どのように経験し、仲間と共有していたのだろうか。Cさんは、自身の美容実践を次のように述べた。

—美容実践はいつ頃から始められたんですか？

C：入隊してからですかね。

—入隊まではスキンケアとか外見を気遣ったりしてなかったんですか？

C：そうですね、入隊前まではそんな肌が悪くなかったので。入隊後始めました。

—そうなんですね。軍隊内では美容について情報共有したりしていましたか？

C：はい、例えば休暇に出て帰ってきた人とか、いい商品を買ってきたらみんなに分け与えて一緒に使ったりして。

—へー面白い。軍隊に行ってきた美意識は変わったと思いますか？

C：はい、行く前は美意識って言っても髪とか肌でしたけど、行ってきてからは、眉毛を整えたり、唇の色、肌のトーンとか気にする部分が多くなったと思います。

—それはどうして変わったと思いますか？

C：うーん、軍隊に入ると、想像より新しく知る情報が多かったんです。

—あー、先輩とか同僚とかから？

C：そうそう。

Cさんのように、入隊後に肌が悪化したため初めて化粧品を使用したという語りは、今回の調査で多く聞かれた。この肌の悪化とは、屋外訓練による日焼けや肌荒れを指す。そして、化粧品をもらったり一緒に使用するなど、仲間との美容実践を介したコミュニケーションも行われていた。さらに、「軍隊に入ると、想像より新しく知る情報が多かったんです」というように、軍隊は美容実践を始めるきっかけだけでなく、知識と関心を高める場となっているようだ。Cさんは、除隊した現在、化粧水やフェイスパックなどの基礎化粧品に加えて、出かける際にはBBクリームや色付きリップクリームなども使用するなど、積極的な美容実践を行っている。このように、軍隊の美容実践は、肌の悪化という共通の悩みをもつ仲間とのコミュニケーションによって促進されているようだ。例えば、同じく軍隊で初めて美容実践を始めたJさんは、「やっぱり軍隊だと日光の下にずっといるので、ある日訓練が終わってロッカーを開けて鏡を見た時に「えっ、誰？」って。軍隊入るまでこんな顔じゃなかったのにと衝撃を受けて。その時にヤバイって危機感を持つようになって、そういうのが多いと思います」と外見の急激な変化を振り返っている。また、「僕らの軍隊の後輩なんか、入る前は化粧水とか乳液と

か一切してなかったんですが、軍隊内でみんなスキンケアとかパックを熱心にしてるから、「俺もしてみようかな」って始めていました」（Dさん）など、周りの影響を受けて美容実践を始める例も聞かれた。

さらに、義務警察に所属していたEさんは、化粧品使用についての質問の流れから、軍隊での美容実践を以下のように語った。

－色のついた化粧品は使用したことありますか？

I：兵役中に休暇で出た時に、友人から「これ塗ったら軍人っぽく見えならしいよ」ってBBクリームを教えてもらって、試しに塗って見たことがあります。それ以降は使っていませんが。

－なるほど。他の人で多かったのが、軍隊内で美容とかスキンケアの情報交換をして美意識が高くなるっていうのがあるみたいですが、Eさんはいかがでしたか？

I：それはありますね。やることもないし、他に話すこともないし。色々な人がいますから。とくに除隊1・2ヶ月前とかになると、社会に戻ったらモテたいし、軍隊っぽい感じが嫌だってなって色んな情報を取り入れて、仲間と共有しますね。一番の目的は軍隊っぽさを消すこと。軍人はモテないってというのが一般的な認識なので。

－軍隊っぽさを消すというと例えば？

I：髪の毛をもっとオシャレにするとか、軍隊っぽいのは、肌が黒くて、ケアされてない、清潔感がない、みたいな。なん

か臭そうっていうイメージがあるので、電車内でも軍人がいるとちょっと距離置きたいな偏見があるにはあると思うので、そういうところですかね。

Eさんも、Dさんと同様に軍隊内では仲間と美容実践に関する情報を共有していた。「やることもないし、他に話すこともないし。色々な人がいますから」という発言からは、多様な出自を持つ男性たちが、ともに暮らす制限された環境において、美容情報が彼らの共通の関心事としてコミュニケーションの橋渡しとなっていたことがうかがえる。また、Eさんは、軍隊での美容実践の目的を「軍隊っぽさを消すこと」だとする。この「軍隊っぽさ」とは、「肌が黒くて、ケアされてない、清潔感がない」外見のことを指しており、「軍隊っぽい感じが嫌だってなって色んな情報を取り入れて、仲間と共有しますね」という発言からは、軍隊っぽさを忌避する意識が、軍隊内で共有されていたことがうかがえる。召（2020）は、20～30代の男性たちが、軍隊の有するマッチョな男らしさを、かなり古い旧時代の産物であると解釈していることを明らかにしている。これは、近代における男らしさが、家長としての生計扶養者と、兵士としての国家安全保障主体という肉体的な強さを象徴していたのに対して、2000年代以降は、新自由主義の流入や産業構造の変化、消費文化の発達により、ケア、化粧品、ファッションなどの非男性的要素が男性の公的領域に介入することで、柔らかい男らしさが求められるようになった変化に起因すると考えられる。とくに、非男性的要素である美容実践は、20～30



代男性たちにとっては自然な文化となり、自分の価値を高め、能力となりうると考えられている（召, 2010: 156）。さらに、この軍隊っぽさへの忌避は、「軍人はモテない」という認識によって生まれている。つまり、彼らの美容実践は単なる肌荒れへの対処としてだけではなく、「女性にどう見られるのか」を意識したジェンダー規範的行動であり、この意識は「男性同士の相互行為において極めて重要な働きをしている」

#### 4.1.2. 上官との関係

こうした美容実践を介したコミュニケーションは、軍隊内の序列と関係があるのだろうか。以下は、軍隊における外見によるストレスの経験についてのHさんの語りである。

ー軍隊で外見からのストレスを受けたりはしましたか？

H: 軍隊内で上官から「ブス」みたいに言われたりしたのを見たことがあります。イケメンとそうじゃない人が並んで歩いていたら「隣はイケメンなのになんで君はイケメンじゃないの？」みたいな。ただの冗談ですけど、見ていて気持ちよくはないじゃないですか。

ーそうなんですか。軍隊でイケメンかどうかで気に入られるとかあるんですか？

H: 大部屋で共同生活をしてたんですけど、上官が気に入って可愛がっている後輩がいたら、「こいつは俺とフェイスバックするから、一緒に寝るから」みたいに連れて行く感じのことはありました。

る」（多賀, 1999: 143）のである。ここでは、「常に根拠が問われることもなく登場し、そして当事者たちの言葉の拠り所として利用され」（多賀, 1999: 138）る〈フィクションとしての女性の目〉が持ち出されることで、軍隊における異性愛規範を基盤としたホモソーシャルな連帯感を高め、美容実践が促進されていると言える。

Hさんは、上官の外見にまつわる悪口を目撃し、ストレスを受けた経験として語っている。ここでは、「ただの冗談ですけど」と断り、正面からの反論を避けている。からかいを社会的に論じた江原（1985）は、からかいの言葉を真面目に受け止めてはいけないというルールが存在し、からかう側がからかわれる側に対して優位に立つという構造を説明している。정, 이 (2018) によると、からかいを通じた相互行為は軍隊内で日常的に行われており、男性同士のからかいは階層的な男性性を整序するメカニズムをもち、好ましい男性性を共有し、そうでない男性性を排除する実践であると指摘している。Hさんの経験したような外見についてのからかいは、軍隊の強固な序列関係に下支えされながら、外見の重要性を男性たちが内面化していくジェンダー実践と捉えることはできないだろうか。

さらに、美容実践を介したコミュニケーションについては、上官が気に入った後輩を連れ出す際に、「フェイスバックするから」と美容実践を口実に連れ出している。こうしたやり取り

については、Hさん自身も上官との美容実践を介したコミュニケーションがあったとして、軍から支給されたカモフラージュクリームを使用する際に、「僕は支給されたものを使っていたんですが、たまに上の人が「これは肌にいいんだよ」とか言って（市販品を、筆者補足）塗ってくれることもありました」と振りかえっている。このようなコミュニケーションは、親密さの確認の意味を含んでいると考えられる。つまり、「身体への言及は他者の領域（テリトリー）への侵犯であり、普段はそれは慎まれるべきもの。他方親密さには、よそよそしい状態から互いの領域に踏み込み、双方のテリトリーへの侵犯が相互に許し合える仲なのだ」という親密さの確認の意味も含んでいる」（須長，1999：168）と須長が指摘するように、平時は絶対的な序列を有する関係において、美容実践は私的な交流のきっかけとなり、さらには特別な関係性を周

#### 4.1.3. 等級と美容実践

これに関して、Jさんは軍隊内でのフェイスパックの使用についての語りのなかで、等級との関係を以下のように述べている。

－軍隊内でフェイスパックを使ったりしましたか？

Jさん：ありましたね。自分の部隊では、等級によって使える人と使えない人がいたんですよ。一日の訓練が終わって自由時間の時に、フェイスマスクをつけてベッドにいて許されるかどうかというのがある。4等級あって、自分の部隊では上等兵からしか使えなかったんです。入っ

知させる親密さの確認としても機能していることがわかる。こうしたコミュニケーションは、美容実践というグルーミング（grooming）行為によって、軍隊における権力の非対称性を利用し、ホモソーシャルな関係性を強化する行為としてとらえることができるだろう。

他にも、Jさんの場合は、美容情報の交換を主に上官と行っており、例えばフェイスパックについて上官に相談した際の会話では、「「おまえもそういう時期が来たか。来るよね」みたいな。「これいいから使ってみな。めちゃくちゃいいよ」って」と言われたという。ここで注目すべきは、「おまえもそういう時期が来たか」という発言である。この発言からは、軍隊内での美容実践には、時期に応じたグラデーションがあることが示唆されている。では、この時期とはなにを意味しているのだろうか。

て一年と3～4ヶ月くらいしないと。

－それはどうやって確認するんですか？

Jさん：「階級が上がってもできない人はできないです。日頃、作業とか仕事をサボらずに迷惑かけずに自分の任務をやったか、後輩からも「この人は先輩だ」って認められた人は「お前はそろそろいいんじゃないのか」みたいに言われますね。自分の場合は自分から聞きましたね。「そろそろ自分いいんじゃないですかね？」って

Jさんの部隊では、フェイスパックの使用が

等級によって制限されていたことがわかる。韓国の軍隊では、勤務形態によって呼称や期間は異なるものの、陸軍の場合、部隊に配属されると、二等兵・一等兵・上等兵・兵長と昇格して除隊する流れが一般的である。Jさんの部隊では、入隊後一年3～4カ月経った上等兵以上のみにフェイスパックの使用が許可されていたという。他方で、「階級が上がってもできない人はできないです」との発言からは、等級とは別の判定基準が、同時に存在していたこともわかる。その基準とは、「日頃、作業とか仕事をサボらずに迷惑かけずに自分の任務をやったか、後輩からも「この人は先輩だ」って認められた人」であるかどうかである。ここでは、軍隊内で共有されている、上等兵に必要な要素を満たした者だけがフェイスパックの使用を許可されており、その等級の認定証のような機能を果たしている。こうした美容実践と等級の関係については、Iさんも「2007～2008年くらいですかね。僕がいた時は、外部の化粧品とか使っ

てはいけなかったんです。上の人たちは使っていたんですが、僕たちの少し前までは基本的に使えなかったです」と振りかえっている。ただし、こうした等級と美容実践の関係は、部隊によって異なるようである。Jさんは、こうした軍隊内でのフェイスパックの使用について、「韓国の男性って飲み場で「うちの部隊が一番辛かったんだよ」って語り合うことが多いんですけど、その話題の中で出てきますね。「うちは二等兵からできたよ」「え、うそ？」みたいな」と語っており、各部隊で異なるルールが共有されていることがわかる。

このように、軍隊内における美容実践には暗黙のルールが存在し、等級による制限や仲間からの認定といった基準を成員たちが共有していた。後述するが、こうした美容実践によるヒエラルキーの明示化は、男性性が多様化・複雑化している現代における「ヘゲモニックな男らしさ」の、ヘゲモニーの維持／獲得戦略のひとつであると考えることができる。

## 4.2. 軍隊での美容実践への意味づけ

### 4.2.1. 美意識の変化

最後に、軍隊でのこうした積極的な美容実践は、身体意識や美容実践に対する考えにどのような影響を与えたのだろうか。以下は、美意識の変化についてのAさんの語りである。

－軍隊から帰ってきて、美意識の変化を感じたりした？

A：軍隊行ってきてから、もっと健康な感じを目指すようになったかな。それまでは、自分の憧れを目指すような感じだっ

たけど。

－健康美を目指すようになった感じ？

健康管理の意味、外見を作るのは自分の健康なんだという意識になって。だから運動が大事だってなるし、肌のケアとかも、健康を気にすることで肌が良くなると考えるようになったり。

－外見についての気の使い方とかも変わった？

A：うん、筋トレをもっと気にするように

なったし、一番は肌を気にするように  
なった。やっぱり軍隊での紫外線がすご  
く影響があったと思う。

ーそれだと、現役の方が肌への美意識が高  
くなるってこと？

A：行ってきてすぐはそうだと思う。でも  
行ってきてない人もそういう周りの人た  
ちから影響を受けて気にするようになる  
んだと思う。

ーなるほど。インタビューする前は、軍隊  
に行くことで男らしくなって、「外見な  
んて気にしない」とか「化粧は女性がす  
るものだろ」みたいな感じになるのかな  
とっていたんだけど。

A：うん、確かに軍隊は「男らしさとはな  
にか」を考える機会にはなったかな。でも  
同時に、「化粧をすることが男らしく  
ない、というわけではない」ということ  
も知った感じ。化粧とかスキンケアをす  
ることが女々しいことではないと気づき  
始めるのもその時期だと思う。

ーなるほど。

A：だって女性はみんな化粧とかスキンケ  
アしているけど、男性がしてはいけない  
理由はないでしょ。お互い、男らしさ・  
女らしさを求めて方向性は違うけど、化  
粧はどちらもしていい。まあ最近の若い  
人たちは、男らしさに力強さというより  
ジェントルマンな感じを求めている感じ  
があるし。

ーたしかにそうだね。

A：スキンケアとか化粧がジェンダーを問  
わないものになった感じ。恥ずかしいこ

とじゃないんだと気づいた感じ。だって  
軍隊行ったら、みんな日焼けした肌を治  
すために、訓練から帰ってきたら冷蔵庫  
に走って冷えたフェイスパックを顔に載  
せて寝転んでるんだし。

Aさんは、入隊前からスキンケアやBBクリー  
ム、コンシーラーなどの化粧品を使用していた  
が、軍隊経験を経て、(1)肌への意識がより高まっ  
たこと、(2)健康的な外見を目指すようになった  
こと、(3)美容実践が「男らしさ」と矛盾する行  
為ではないという認識に変化したと語っている。  
(1)は、軍隊での紫外線の影響について述べ  
られているように、急激な肌の悪化によるもの  
であろう。これは、例えばDさんも軍隊前後  
での美容実践の変化について、「一番は日焼け  
止めをちゃんと使うようになりました」と述べ  
ており、視覚的な外見の変化は美容実践を促す  
直接的なきっかけとなり、除隊後も実践が継続  
される場合も多いようだ。(2)の健康志向の高ま  
りは、軍隊での規則正しい生活や、筋トレなど  
の運動習慣によって健康管理の大切さを知り、  
筋肉や美しい肌といった外見的要素が健康と結  
び付けられて語られている。ここで、Aさん  
が目指す美しさとは、「健康な感じ」であり、  
そうした外見をつくる方法として、「肌のケア」  
が筋トレと並列で挙げられている。ここでの「肌  
のケア」は、「健康を気にすることで肌が良  
くなる」とあるように、運動や規則正しい生活  
を指すようだが、「外見についての気の遣い方」  
についての語りからは、紫外線を防いだり悪  
化した肌をケアする美容実践も、「健康な感じ」  
な外見のために大切であることが示唆されてい

る。(3)では、軍隊での経験によって、美容実践が男らしさと相反する行為ではないという認識に変わったことが述べられており、裏を返せば「化粧をすることは男らしくない」という意識が、入隊前まではあったことがうかがえる。一方で、「男らしさ・女らしさを求めて方向性は違うけど、化粧はどちらもしていい」と述べながらも、「確かに軍隊は「男らしさとはなにか」を考える機会にはなったかな。でも同時に、化

粧をすることが男らしくない、というわけではない」ということも知った感じ」と述べている。つまり、美容実践は「男らしさ」と相反するわけではないが、「男らしい」行為であるとの認識ではないことがうかがえる。このように、男性の美容実践は、「女々しいこと」ではないが「男らしいこと」でもないという、アンビバレントな意識があるようだ。

#### 4.2.2. 象徴的相互作用論からの考察

上述したAさんの語りを、象徴的相互作用論に照らしてみると、「健康」というシンボルを用いた主観的意味づけと、美容実践と男らしさの関係を、相互作用から再解釈していく過程として分析することができる。まず、前半部分でAさんは、軍隊経験の前後で美意識の変化が起こるという筆者の期待を受けて、自分が置かれている状況や自分の行為の方向に照らしたうえで、外見の美しさを健康の表れであると意味づけるようになった変化を語っている。そこでは、従来、男らしさと結びつけられてきた筋肉（*이*、*근*, 2007）と筋トレを挙げながら、肌と美容実践がそれらと等価的存在であるとして、健康管理という規範に則って美意識を説明している。後半部分では、美容実践と男らしさは相反するのではないかという筆者の提起に対して、軍隊での仲間たちとの美容実践の経験から、「美容実践＝女性のもの」という解釈が変化していった過程が語られている。こうしたAさんの外見と美容実践への主観的な意味づけは、筆者の期待や社会の規範を主体的に受け止め、意味付与し、解釈したうえで再分類・修

正されており、筆者との社会的相互作用過程によって形成された産物であると言える。

このような象徴的相互作用に着目することで、Aさんが、入隊前は美容実践と男らしさに矛盾を感じていたことに加えて、軍隊経験から、そうした矛盾に対してジェンダー規範の再構築を行うことで受け入れていく、ミクロな文脈が明らかになった。Aさんと筆者との間で生じた、「健康」というシンボルをめぐる社会的相互作用過程は、同様に、入隊前と入隊後、また除隊後も、家族・友人・同僚などとの間で生じていたと考えられる。今後は、一個人の美容実践をめぐるミクロな諸関係に着目し、会話分析などを使って、社会的相互作用過程の複合的な考察を加え、そうした網の目がより合わされた結果として、韓国男性の身体構築がどのように行われるのかを検討したい。さらに、筋トレと美容実践の共通性は、近代の男性性が健康的な肉体美と結びつけられていった身体構築の歴史との連続性として、今後新たな議論の余地があるのではないだろうか。



## 5. 考察——美容実践と男性性の位相——

本稿では、韓国男性の軍隊という閉鎖的空間における日常実践の内在的経験にもとづく語りから、軍隊での美容実践およびそれに伴うコミュニケーションと、そうした経験への意味づけを、象徴的相互作用論の視点から考察してきた。軍隊内では、美容実践がコミュニケーションを介して積極的に行われ、ジェンダー規範との結びつきが見られた一方で、美容実践自体は必ずしも「男らしい」行為として認識されているわけではない、というアンビバレントな意識があることも示唆された。では、こうした知見は男性性の視点からはどのように捉えられるだろうか。

Hooper (2001) は、Connell (1995) の「複数の男性性」論に依拠して、国際関係論で用いられる男女二元論に異議を唱え、「覇権的な男らしさ」のヘゲモニーの維持／獲得のためには、しばしば女性的な価値も使用されることを指摘した(海妻, 2006)。Hooper (2001) は、例として欧米において家事育児を積極的に行う「ニュー・マン」(New Man) を挙げ、性役割にとらわれている男性に「過剰な男らしさ」(hypermasculinity) を付与することで、新たな「覇権的な男らしさ」を獲得していく過程を描いている。これは、行為の「男らしさ」の意味づけが、行為自体の性質ではなく、そのジェンダー化された解釈によっていかようにも変容することを意味する。軍隊においては、「下士官兵が要求されている、上官の命令への全面的な服従、念入りに装うこと、日常業務の繰り返しなどは、「男らしい」というよりはむしろ「女

らしい」性質に分類し得る」(佐藤, 2006: 273)。しかし、軍事任務における「男らしさ」との結びつきは、そうした振る舞いを「女らしい」と解釈されないよう入念な策略をめぐることによって達成されている脆い構築物(佐藤, 2006: 273)なのである。つまり、従来の軍事任務と「男らしさ」の関係は、「女々しさ」(effeminate) や「過剰な男らしさ」を巧みに周縁化することで成立しているのである。

本稿で取り上げた韓国の軍隊における男性たちの一例では、美容実践が女性にモテない「軍隊っぽさ」を回避する方策として用いられ、円滑なコミュニケーションや親密さの証や、許可された者のみが行使しうる専有物とされるなど、ヒエラルキーの確認と強化の意味合いを含む行為として機能していた。この「軍人っぽさ」を、「女性らしさに不寛容である過剰な男らしさ」(Hickey, 2016) と仮定するならば、美容実践をしない／できない者を周縁化することで、男性性のヒエラルキーが再編されていると考えられる。そして、こうした構造は、男性間の序列関係だけでなく、同性同士の親密さ(=ホモソーシャルな関係)の確認行為としても美容実践がなされており、決して男性性と相反するものではないという規範の身体化を通して達成されるのである。つまり、本調査で語られた彼らの経験は、男性たちの美容実践という、一見「女らしい」行為が、軍隊内の男性性競争において優位にあることを示す、新しい男らしさとして戦略的に利用されることで、男性の権力構造が再生産されている一例であると考えられ

る。このような調査結果は、身体像が対人関係のなかで形成され、権力関係が維持される過程を示した先行研究を発展させることができたのではないだろうか。すなわち、美容実践という行為自体が集団内の調和に貢献し、権力維持のためではなくヒエラルキーの明示化として機能する、軍隊内でのコミュニケーションの独自性を明らかにした点で、新規性があるといえよう。

長い軍事政権を経験してきた韓国社会では、軍隊の存在は男性中心主義やジェンダー問題の根拠とされ、多分に政治的な話題として認識されてきた。こうした韓国の兵役について、本稿は、軍隊という義務的な制度に付随して自発的に生まれる美容実践という新たな習慣や、それに付随したコミュニケーションの存在を示唆したという点で、学術的意義があるといえよう。とくに本稿では、ジェンダーを社会的・文化的実践の遂行により反復的に構築される差異であるとみなす Connell (1995) の議論に加えて、階級ドミナンスの有無だけでは説明しきれない様々な政治的・文化的変動を、「複数の男性性」間でのヘゲモニー形成に影響を与えるものとして組み込んだ Hooper (2001) の議論から考察

を試みた。そこから、軍隊のような物質的基盤が有する独自のヘゲモニー力学のみならず、全く異なる力学を有する一般大衆文化（美容実践）という変数の相互規定性に着目した。これにより、階級的ドミナンス以外の要素も作用するかたちで、「覇権的な男らしさ」が形成される過程を明らかにすることができたと考える。さらに、従来の軍事分野の男性性研究が陥りがちだった、軍人たちを社会変化の文脈から切り離し均質化する議論を発展させ、軍人と非軍人の男性に関わる、横断的にジェンダー化された実践の共通性の一端を見出すことができたという点は、理論的貢献と言えるのではないだろうか。

一方で、本稿は軍隊と社会構造的な文脈との交差性を、共時的な個人の主体性から記述するに留まり、個人レベルの議論が歴史的な社会構造とどう結びつくかという通時的な議論にまで至っていないという限界がある。今後は、社会制度・政治制度が作り出す権力構造の可変的なイデオロギー過程として男性性を捉える歴史研究の視座 (Gail, 1995; 渡辺, 2021) を取り入れ、通時的でより広範な調査から男性性のダイナミクスを記述していきたい。

## 謝辞

この論文は、多くの方々の助けによって完成させることができた。

まず、インタビュー調査に協力してくださった方々にお礼を申し上げたい。突然のお願いにも関わらず、親切に引き受けてくださり、私の拙い質問に丁寧に答えてくださったその優しさによって、この研究を遂行することができた。その際に頂いた励ましの言葉は研究を続ける上で大きな支えとなった。そして、新型コロナウイルスの流行により、渡韓できず人集めが厳しい状況のなかで、現地の人集めにご協力くださった平井敏晴先生にもお礼を申し上げたい。先生のおかげで様々な背景を持つ方々への調査が可能となり、より有益な研究となった。

そして、この研究を遂行するにあたっては、多くの方々のご指導ご鞭撻を賜った。まず、いつも優しくも厳しく研究を見守ってくださった真鍋祐子先生に感謝を申し上げたい。先生は、自信を失いかけている私を温かく励ましてくださるだけでなく、韓国研究

の面白さを改めて教えてくださった。また、田中東子先生には、客観的で的確なご助言を頂き、散漫な論点を纏める手助けをして頂いた。

## 註

- (1) 現代の男らしさの変容とともに登場した、従属的で疎外された男性性や女性的な要素を組み込んだ男性のことを指す。「包括的男性性」(Anderson, 2009)や「ハイブリッド男性性」(Messner, 1997)などと称され、ファッションや性役割において柔軟な男らしさを表現することで既存の権力構造を再生産していることが指摘されている。
- (2) 徴兵身体検査で1～3級に分類され、実際に入隊し訓練を受ける男性たちを指す。
- (3) “Advancements in Men’s Personal Care Products Gaining Rapid Traction in the Market: Persistence Market Research Study” President Market Research 2021.7.30  
<https://www.persistencemarketresearch.com/mediarelease/mens-grooming-products-market.asp> (最終アクセス 2023/9/25)
- (4) 儒教の教えに由来する男性像で、中国における「文」(wen)、韓国における「士人」(선비)など、学識が高く高尚な身分の男性たち特有の両性具有の美しさを指す。
- (5) “‘꽃 중 년’의 시작은 기미 없는 깨끗한 피부부터” 매일경제 2019.10.17 <https://www.mk.co.kr/news/business/view/2019/10/841139/> (最終アクセス 2023/9/25)
- (6) “그래서 나는 성형을 생각합니다.” 대학내일 20대연구소 2015.7.2 <https://www.20slab.org/archives/7132> (最終アクセス 2023/9/25)
- (7) 韓国では、2007年頃から、美意識を高く持ち美容実践に積極的な男性を、英語で「手入れ」を意味する“grooming”にちなんで、「グルーミング族」(그루밍족)と呼ぶ。
- (8) “[Video C]” 김병장도 화장한다” - 남자들 화장 전성시대” 中央日報 2015.11.5  
[https://biz.chosun.com/site/data/html\\_dir/2015/11/05/2015110500986.html](https://biz.chosun.com/site/data/html_dir/2015/11/05/2015110500986.html) (最終アクセス 2023/9/25)
- (9) 韓国の軍隊における美容実践についての先行研究は非常に手薄であり、化粧品使用に関する統計調査が主である。質的調査に関しては、管見する限り2.2.で示したジャン(2014)の研究のみで、断片化されているうえに美容実践への意識や軍隊内での相互作用については言及されていない。さらに、一次資料がほとんど存在しないか、入手が困難であるという事情も考慮すると、文献のみでの調査は困難であり、本研究の目的が美容実践という行為自体ではなく、行為への意味づけやそれを取り巻くコミュニケーションを探ることであるため、インタビュー調査によって彼らの経験世界を語られ方から理解しようとする手法が最適であると考えられる。
- (10) 本調査の対象者には最大16歳の年齢差があり、彼らが服務した時代の南北関係や国際情勢といった、軍隊や男性性にかかわる価値観に影響を与える変数については別稿を期したい。また、本調査では、軍隊における美容実践が2007年当時より行われていたとの証言は得られたが、いつから軍隊での美容実践が始まったのかという通時的な視点の考察については、より対象年齢を広げた調査を現在進行中である。
- (11) 使用言語の違いによるズレを最小限に留めるため、日本語の場合は、筆者が韓国語での表現の確認と言葉の補完を適宜行い、調査の再現性を担保できるよう努めた。
- (12) Korean Augmentation to the United States Army の略。在韓米軍にて任務を行う。
- (13) 1967年に戦闘警察とともに創設され、1983年に独立した制度となる。主な任務は、派出所勤務、交通整理、治安維持で、非常時にはデモ隊の鎮圧なども行う(康, 2011)。
- (14) 韓国の義務兵役では、陸軍以外にも空軍・海軍・海兵隊・KATUSA・義務警察などの様々な部隊へ配属され、文化や勤務形態も多様で、美容実践のルールも異なることが予想される。本稿では陸軍を中心に議論を行うが、その他の部隊および社会服務要員と呼ばれる福祉活動を行う勤務を経験した男性たちへの調査を現在進行中である。博士論文では、これらの勤務形態における美容実践や身体意識の差異や共通項を洗い出すと同時に、調査対象を40代まで広げることで、通時的な考察を行う予定である。

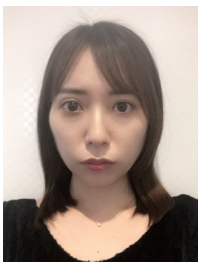
## 参考文献

Anderson, E, 2009, *Inclusive masculinity: The changing nature of masculinities*, New York: Routledge.  
Atkinson, M, 2008, “Exploring male femininity in the “crisis”: Men and cosmetic surgery”, *Body & Society*, 14(1): 67-87.  
Blumer, H, 1969, *Symbolic interactionism: perspective and method*, Prentice-Hall. (= 後藤将之訳, 1991, 『シンボリック相互作用論: 視点と方法』, 東京: 勁草書房)

パースペクティヴと方法』勁草書房.)

- Connell, R. W., 1987, *Gender and Power*, Cambridge: Polity Press. (= 森重雄他訳, 1993, 『ジェンダーと権力——セクシュアリティの社会批判』三交社.)
- , 1995, *Masculinities*, Polity, Berkeley: University of California Press. (= 伊藤公雄訳, 2022, 『マスキュリニティーズ—男性性の社会科学』新曜社.)
- Connell, R. W., & J. W. Messerschmidt, 2005, "Hegemonic Masculinity: Rethinking the Concept", *Gender & Society*, 19(6): 829-859.
- Enloe, C., 2000, *Maneuvers: the International Politics of Militarizing Women's Lives*, Berkeley: University of California Press. (= 佐藤文香訳, 2006, 『策略——女性を軍事化する国際政治』岩波書店.)
- Gail Bederman, 1995, *Manliness and Civilization*, University of Chicago Press.
- Gilman, S. L., 1999, *Making the Body Beautiful: A Cultural History of Aesthetic Surgery*, Princeton: Princeton University Press.
- Hamermesh, D. S., & Biddle, J. E., 1994, "Beauty and The Labor Market", *The American Economic Review*, 84(5):1174-1194.
- Higate, P. R., 2007, Peacekeepers, Masculinities, and Sexual Exploitation. *Men and Masculinities*, Sage, 10(1): 99-119.
- Higate, P. R., & Jeff, H., 2003, *Military Masculinities: Identity and the State*. Praeger.
- Holliday, R., & Cairnie, A., 2007, "Man made plastic: Investigating men's consumption of aesthetic surgery". *Journal of Consumer Culture*, 7(1):57-78.
- Holliday, R., & Elfving-Hwang, J., 2012, "Gender, globalization and aesthetic surgery in South Korea". *Body & Society*, 18(2):1-24.
- Hooper, C., 2001, *Manly States: Masculinities, International Relations, and Gender Politics*. Columbia University Press.
- Elfving-Hwang, J., 2020, "Man Made Beautiful: The Social Role of Grooming and Body Work in Performing Middle-aged Corporate Masculinity in South Korea", *Men and Masculinities*, 24(2): 207-227.
- Futosh, T., 2005, "East Asian Masculinities" Kimmel, M. S., & Jeff, H. & Connell, R. W., eds., *The Handbook of Studies on Men & Masculinities*. SAGE Publishment.
- Jung, S., 2011, *Korean masculinities and transcultural consumption: Yonsama, Rain, Old boy, K-pop idols*. Hong Kong University Press.
- Messner, M., 1993, "'Changing men' and Feminist Politics in the United States". *Theory and Society* 22 (5): 723-37.
- Nancy, A. N. & Renee, C. H., ed. 2016, *The Wiley Blackwell Encyclopedia of Gender and Sexuality Studies*. John Wiley & Sons, Ltd.
- Turner, B. S., 1992, *Regulating Bodies: Essays in Medical Sociology*. London: Routledge.
- Flick, U., 2009, *An introduction to qualitative research*, SAGE Publishment. (= 小田博志他訳, 2011, 『質的研究入門: 「人間の科学」のための方法論』春秋社.)
- 江原由美子, 1985 『女性解放という思想』勁草書房.
- 海妻径子, 2006 「フーバーの「マスキュリニズム」論の意義と課題—男性性研究におけるコンネル Masculinities 以降の理論展開—」『フィロソフィア・イワテ』38:1-12.
- 川口遼, 2012, 「男性性間の階層的関係とジェンダー秩序」『女性学』19(0):110-116.
- 権仁淑, 2006, 『韓国の軍事文化とジェンダー』お茶の水書房.
- 康熙奉, 2011, 『韓国の徴兵制 兵役経験者が吐露した真実』双葉社.
- 佐々木正徳, 2004, 「『韓国における男性性』研究の意義についての一考察」『九州教育学会研究紀要』(31):273-280.
- , 2013, 「代替服務という生き方——全韓国の男性性と兵役の多様性」『長崎外大論叢』(17):93-104.
- 佐藤文香, 2010, 「テーマ別研究動向 (男性研究の新動向)」『社会学評論』(61)2:186-195.
- , 2006, 「軍事化とジェンダー」江原由美子、山崎敬一編著『ジェンダーと社会理論』有斐閣.
- 須長史生, 1999, 『ハゲを生きる——外見と男らしさの社会学』勁草書房.
- 谷本奈穂, 2018, 『美容整形というコミュニケーション——社会規範と自己満足を超えて』花伝社.
- 朴眞煥, 2008, 「韓国の大学における軍事文化と日常——徴兵制をめぐる言説と予備役, 現役, 女子学生の実践」『コンタクト・ゾーン』(2):89-108.
- 藤田智子, 2005, 「青年期における男性の身体像に関する考察」『ジェンダー研究』8: 79-98.
- 渡辺浩, 2021, 『明治革命・性・文明: 政治思想史の冒険』東京大学出版会.
- 김고연주, 2010, 「'나 주식회사'와 외모관리」김현미, 강미연, 권수현, 김고연주, 박성일 『친밀한 적』 이후.

- 김엘리, 2020, 「20 ~ 30 대 남성들의 하이브리드 남성성」 『한국여성학』 36(1):139-173.
- 대한민국국방부, 2023, 「2023 년국방백서」
- 이윤정, 권순장, 2007, 「남성의 근육 만들기와 신체 이미지」 『한국심리학회 학술대회 자료집』 (1):128-129.
- 장서원, 한경희, 2014, 「20 대 초반 남성군인과 민간인의 화장품과 피부미용에 대한 관심과 실천행위」 『한국지역사회생활과학회지』 25(2):193-205.
- 장혜윤, 2014, 「20 대 남성의 군복무 경험에 따른 외모관리행동에 관한 질적 연구」 연세대학교대학원 의류환경학과 석사논문.
- 정성조, 이나영, 2018, 「보이지 않는 군인들 : 한국 군대 내 동성애혐오와 성소수자 정체성」 『문화와 사회』 26(3):83-145.
- 조혜정, 1993, 『한국의 여성과 남성』 문학과지성사. (= 春木育美訳, 2002, 『韓国社会とジェンダー』 法政大学出版局.)



小平 沙紀 (こひら・さき)

[専門] 社会学、地域研究、ジェンダー論

[主たる著書・論文]

小平沙紀, 2024, 「韓国男性の自己管理としての美容実践とスベック語り一動機の語彙を手掛かりに」 『東アジア研究』 32:1-18. (2024 年 3 月)

[所属] 東京大学大学院学際情報学府博士課程

[所属学会] 日本社会学会、カルチュラル・スタディーズ学会、韓国・朝鮮文化研究会、日本出版学会、東アジア学会、関東社会学会



# Beauty Practice and Phases of Masculinity among South Korean Men : Communication in the Military.

Saki Kohira\*

Beauty practice among men has become more common globally in the recent years, which can be observed in the annually expanding market for men's cosmetics. In South Korea, the practice is not only limited to women but also among men; with South Korean men contributing to the highest global per capita sales of men's cosmetics. Some studies had suggested that there is a correlation between the male-dominated norms such as Confucianism and military service to beauty practice and the high aesthetic consciousness among South Korean men. This paper attempts to clarify some aspects of the correlation that may have been overlooked through an interview survey with focus on the South Korean men's military service experiences. The results offer a new insight in the South Korean men's beauty practices that are paradoxically fostered by the military, an institution that symbolizes masculinity.

---

\* Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, the University of Tokyo

**Key Words** : Korean men, Beauty practice, Military, Military service, Masculinity.